

清華大学から出た日本研究者

——ある日本研究者の回想——

馮 昭奎

(訳||宮田千信)

私は清華大学（当時は理系の名門大学）の無線電子学部の一九六五年卒業生である。卒業後はあるマイクロエレクトロニクスの研究所に配属されて勤務していた。しかし、卒業して一八年経った一九八三年六月、中国社会科学院に移り、日本研究に身を転じるようになった。工程師（エンジニア）から社会科学戦線に属する日本問題研究者に「転向」したのである。本稿では、私が日本問題研究に従事するようになった経緯から述べ、理系出身者が「一足飛びに」社会科学分野に飛び込むこととなった一連の「偶然」を述べたいと思う。これらの「偶然」は、ある意味で「改革開放」の新時代が到来し、中国が求める人材にも変化が生じた「必然」を反映しているかもしれない。

一 平坦ではなかった日本研究の道

私は清華大学を卒業後、「四清」運動（一九六二年から一九六六年にかけて展開された社会主義教育運動）、三線建設（一九六〇年代から七〇年代に実施された鋳工業の内陸部への移転政策）に参加し、三年間下放され、再び元の配属先に戻った。「文革」の混乱の中でも技術の仕事に打ち込み、工程師（中国では一種の職階である）に昇格した。一九七〇年代終わりに日本のある大学の電子研究所に二年間留学した後、配属先に戻った。これが文系に転向する前の私の略歴である。

一九八二年頃、中年にさしかかった私は、自分が技術関



馮昭奎[Feng Zhaokui]

● 解説……………

馮昭奎氏は社会科学院日本研究所副所長を務めた著名な日本研究者である。とくに二〇〇三年から翌年にかけて、中国国内で対日政策をめぐる「対日新思考」と呼ばれた大胆な問題提起が行われた際、中国の日本研究者のなかでほとんど唯一公然と「新思考」論を弁護したことで知られる。愛知大学は二〇〇五年度から三年間、馮氏を客員教授として招聘し、現代中国学部における「日中関係論」の講義のほか、さまざまな研究活動にも参加していた。『中国21』でも臨時特集号（二〇〇六年三月刊）で馮氏の論説と座談を掲載している。

馮氏が任期を終え帰国する直前の二〇〇八年春、同僚の服部健治氏（現中央大学教授）と筆者（砂山）は、馮氏の日中関係についての考えや日本研究者としての歩みについて二度にわたるインタビューを試みた。氏の話は縦横に及び、合計五時間分の記録が残された。その記録の整理が終わらないうちに、帰国後の

馮氏は二編の回想文を中国の雑誌に発表した。それらはインタビュの内容の簡にして要を得た記述というべきものであったので、馮氏の許可を得てこちらを訳出することにした。

馮氏は清華大学で電子工学を学んだ生粋の「理系」研究者であった。その氏が「日本問題」研究者に転じることになる経緯については、本文第二節で詳述されるが、文化大革命後の政策転換が中国知識人の「専業」にまで及ぼした広範かつ深甚な影響を知ることができる。また、馮氏が今もきわめて高く評価している文革前の清華大学での教育は、二歳年下で、水利工程系の学生であった胡錦濤総書記が受けた教育でもあった。しかし、なんといいっても本文のハイライトは、「対日新思考」擁護論のためにウェブ上で「売国奴」呼ばわりされていた馮氏が、招かれて胡錦濤総書記の前で直々に報告をする機会を得たことである。当時の中国首脳部の対日政策を考える上で興味深いエピソードである。

（砂山幸雄）

連の資料の翻訳、整理、分析作業にむいており、またそれに興味があると感じた。そこで世間から離れて資料を調べたり、筆記したり、報告書を書いたり、国外の最新科学技術の発展を追跡できる「静かな文机」を渴望していた。しかし正に「犬も歩けば棒にあたる」とでも言おうか、数々の「偶然」により、私は自分の意思とは無関係に、中国社会科学院日本研究所に脚を踏み入れることとなったのである。

一九八三年六月、日本研究に転向した後、文系出身の同僚と付き合うこととなったのだが、初めは本当になじめなかった。特に日本語専攻の同僚と比べると、自分の日本語レベルは大変劣っており、同僚たちが流暢な日本語を話しているのを聞くと、非常に焦りを感じた。研究所に入ってから間もなく、経済研究室に異動となり、そこでも私は経済学関連の知識を急いで補わなければならないと感じた。一九九〇年代後半、日中関係問題に関心を持ち始めてからは、国際関係理論にかかわる知識を補習するスケジュールが加わった。とにかく、中年になつての理系から文系への「商売替え」は、非常に疲れるものだった。今振り返ってみると、日本研究の分野で主に三つの事に携わった。それは、一、日本の「技術立国」と科学技術の研究、二、戦後日本経済発展の経験の研究、三、日中関係の研究——の三つである。

(一) 日本の「技術立国」と科学技術の研究

できるだけ早く日本研究者の仲間入りをするため、私は清華大学で築いた科学技術の知識を活かし、日本の「技術立国」研究を最初の課題とした。日本研究所に入つて間もなく、「アメリカはなぜ日本に軍事技術の提供を要求したか？」という題名の報告書を書いたが、それは新華社の「参考資料」に発表され、翌年には中国社会科学院の「優秀報告書」に選ばれた。一九八四年前半、私は日本に数か月の視察に赴き、帰国後「資源小国の圧力と活力」という題の報告書を書いたが、それは党中央に「県団級（県長・連隊長レベル）文書」に選定されて全国に配られ、後にまた中国社会科学院の「優秀研究報告書」にも選ばれた。この報告書は多くの生き生きとした実例を挙げ、天然資源の乏しさが圧力となつて、日本人が頭脳資源の開発に意を注ぐようになったこと、また日本経済の発展という成功例は、資源欠乏の圧力と、この圧力に刺激されたダイナミズムのほう天然資源そのものより貴重だということを物語っていることを述べた。

(二) 日本の経済発展の経験の研究

しかし、日本経済研究室のメンバー、責任者として、いつも日本の科学技術だけを研究しているわけにはいかな

かった。そこで、多くの時間を割いて経済学関連の重要著作を読み、経済学関連の知識を急いで補った。それと同時に経済研究室および他の部署の協力を得て、共同テーマに取り組み、日本の経済発展の経験を紹介する一連の研究成果を出版した。例えば、『日本の新技術革命』（湖南科技出版社、一九八五年）、『日本経済の活力』（航空工業出版社、一九八八年）、『ハイテクと日本の国家戦略』（東方出版社、一九九一年）、『日本の経験と中国の改革』（経済科学出版社、一九九四年）などである。これらはすべて日本研究所研究チームの名義で出版したものである。一九九三年から一九九四年にかけては「中日流通業比較研究」の研究チームを組織し、このテーマについて『中日流通業比較研究』（中国軽工業出版社、一九九四年）、『日本の小売業』（人民出版社、一九九四年）、『中日流通業比較』（中国社会科学出版社、一九九六年）、『A Comparison Between Distribution in China and Japan (Beijing: China Zhigong Publishing House, 1999)』の四冊の研究書を出版した。その後、『技術立国への道』（陝西人民教育出版社、一九九七年）などを出版した。

一九八四年から一九九〇年まで、私は経済研究室の他のメンバーと党や政府が開催した世界経済、日本経済に関する座談会によく出席し、多くの報告書を書き、個々の経済分野あるいは経済政策において「日本はどのようなようにした

か」を紹介した。また、党や政府機関が日本に代表団を派遣する際には、出国メンバーが交流する予定の日本の各界の状況をしばしば紹介した。同時に、我々はよく日本の経済学者を中国に招いて交流を行った。

私は高等教育出版社の依頼を受けて、『日本経済』という本を編纂した。この本は一九九八年に初版が発行され、二〇〇五年には第二版が発行され、二〇〇八年には第二版が増刷された。これは私のように遅ればせながら経済分野に足を踏み入れたものにとって、長年の「補習」の成果と言えるだろう。二〇〇〇年、この本は中国社会科学院の優秀研究成果の三等賞を獲得した。この他、現在に至るまで私は一二冊の個人著作を出版した。

おそらく私がただ自分の研究に打ち込むだけでなく、積極的に共同研究チームを組織し一連の成果をあげたことが、上級機関の関心を惹いた。一九九〇年、中国社会科学院事務局が私を訪ねてきて、日本研究所の副所長になるよう求めてきた。私は辞退し、他の適任者にあたるとお願いした。しかし、まもなく中国社会科学院の中国共産党委員会書記が突然日本研究所にやってきて、外部機関から異動してきた幹部を所長に、私を副所長に任命すると発表した。私は仕方なく従うほかなかった。後に、この所長は日本研究所を離れ、私は所長不在のもと、副所長を数年間務めた。自分の行政能力が非常に劣っていたために、「静かな

文机」を失った私には、副所長という仕事はまったたくの苦役でしかなかった。なんとか一九九六年まで頑張ったが、過去に一度も直属の上司を煩わせたことのない私が、初めて「国際部門」を担当する副院長を訪ね、辞表を提出し、受理された。私はこれでやっと肩の荷をおろし、「静かな文机」の前に戻ることができた。

(三) 日中関係の研究

一九九〇年代後半以降、日中関係に起こった一連の憂慮すべき変化のために、日中関係問題に関心を持つ人がだいに増えていった。私も例外ではなかった。しかし、日中関係の研究者となるためには、国際関係理論の基本知識を身につけなければならなかった。そこで私は再び国際関係理論を急いで「補習」しはじめた。しかし現在に至るまで西洋の国際関係理論の主流を占める現実主義派というものに対し、私は読めば読むほど違和感を感じた。というのは、その理論は基本的に二〇世紀の西洋列強の植民地争奪とその他の海上覇権争奪を総括した理論であり、二一世紀の新しい世界情勢には合わないし、ましてや中国の国際関係研究にはそぐわない。しかしながら、中国の国際関係理論の学者の多くは「現在はまだ中国の国際関係理論がない」と考えている。私も、中国の一部の学者が「西洋の国際関係理論には『普遍的価値』がある」とする考え方には

賛同できない（「狼の哲学」に対抗するためには、「狼の哲学」という武器を使うべきだとする声もある）。このような「理論の行き詰まり」に対し、私は選択の余地がなかった。このような状況のもと、清華大学で真剣に学んだ弁証法的唯物主義と歴史唯物主義を活かすのみだった。私の心の中に深く根付いていたこの二つの「主義」は、私が長期にわたり日本の科学技術や経済を研究してきた過程でも影響を与えてきたのだが、自分としてはそういう自覚はなかった。私が日中関係を自分の研究重点に据えて初めて、この「二つの主義」を活用することを自覚し、自信を持つようになったのである。私は一九九九年と二〇〇二年に相次いで『対話——北京と東京』と『日本——戦略の貧困』の二冊を出版した。後者は中国社会科学院優秀研究成果の二等賞を得た。これは日本研究の成果として社会科学院で初めて得た二等賞だった。

二〇〇二年末、元『人民日報』評論員馬立誠が『戦略と管理』という雑誌に「対日関係の新思考——中日民間の憂い」という論文を発表した。また二〇〇三年春、中国人民大學の時殷弘教授もその雑誌に「中日接近と『外交革命』」という論文を発表した。この二つの論文は国内のインターネット上で大きな波紋を広げただけでなく、日本の大新聞・雑誌にも大きく取り上げられ、日中双方の世論界にセンセーションを巻き起こした。二〇〇三年夏以降、イン

ターネット上では上述の二つの論文への批判が「漢奸」、「売国奴」といった罵倒の声にまでエスカレートし、書き込み件数は数百万件にまでのぼった（二〇〇八年八月、グーグル中国語サイトに「対日新思考」と入力して検索すると、未だに一二九万件の検索結果が得られる。この数字には当然すでに消去された多くの書き込みは含まれていない）。『南方週末』の記事に書かれたように、数千にものぼる中国語ネットフォーラムにおいて、「対日新思考」は「嫌われもの」となって、非難の大合唱を招いた」のであった。

馬立誠と時殷弘は専門に日本研究をしている学者ではない。この二つの論文への論争と批判に対して、専門に日本研究をしている多くの研究者は「まったく相手にしなかった」。『南方週末』の記事によると、当時「人民網」日本版（『人民日報』の日本語ウェブサイト）が「もともとは日本研究の学者を招いて、「対日新思考」の議論を行いたいと思ひ、数人の学者にあたったが、だれも表立ってこの事を討論しようとはしなかった」という。学者によっては「時氏の論文は反駁するに値しないので、この論争には巻き込まれたくはない」と答えている。

日本問題研究者たちがほとんど「この論争に巻き込まれたくはない」としていた時、『戦略と管理』の編集部から電話がかかってきて、「対日新思考」について意見を述べ

てみないかとの誘いがあった。当時、私は馬立誠と時殷弘のいくつかの主張について疑問を持っていた。彼らの「日本の謝罪問題はすでに解決済み」あるいは「歴史問題を棚上げする」という主張は、当時の中国外交部が歴史問題において日本とたゆまぬ戦いを展開していることに對し不利に働く。『南方週末』も「対日新思考」のポイントは「歴史問題を（日中関係のなかで）副次的な位置に置いている」ところであるとし、著名な学者の主張を列挙して、「ほとんど全員反対意見を持っている」と書いた。では、どのようにして歴史問題を解決すればよいのだろうか。私はこのきわめて根本的な問題に對し、長期にわたり国家に育成された日本問題研究者として、この重要な時節に際して、立ち上がって自分の意見を表明すべきなのではないかと感じた。

激しい葛藤の後、理系出身のエンジニアから日本研究者に転身して満二十年の二〇〇三年夏、私は『戦略と管理』の原稿依頼を引き受けることにし、「対日新思考」を論ずる書き、その中で自分の考え方と馬、時両氏の考え方とは異なるところもあるが、日中関係には確かに「新思考」が必要であり、日中関係は非常に敏感な話題であるが、人々に異なる意見を述べる自由を与えるべきで、むやみに「漢奸」のレッテルを貼ったりしてはならないということを述べた。すると、この意見を発表して間もなく自分もネチズ

ン(ネット市民、原文は「網民」)から「漢奸」のレッテルを貼られてしまった。

歴史問題について考えるとき、私は日本に留学し電子技術を学んでいた時の出来事を思い出す。私より十歳ほど年上の多くの日本人は過去の戦争に対し、心から「日本は中国にひどいことをした、本当に申し訳ない」と度々私に言った。また私が留学していた静岡大学電子工学研究所の忘年会のことだが、私は思わず過去の事を話したことがある。日中戦争末期、日本の憲兵は上海で私の父を逮捕し、非常に残忍な手段で父に愛国作家の楼適夷(日本留学経験をもつ党員作家で、『蟹工船』の訳者でもある)の隠れ場所を吐かせようとした。決して屈することのなかった父に対し、楼適夷は後に次のような詩を詠んで父を称賛した。「同志のため両脇に刀を突きつけられても恐れず、烈火の如き酷刑にも屈せず」(挿刀両腋為同儕、烈火酷刑煉鉄骨)。日本憲兵が異国の地で行った残酷な行為に対して、その場にいた若い日本人大学院生は驚きを隠せなかった。彼らは「ひどすぎる」と言って、私の父に対し深い同情を示してくれた。あの時「真情を吐露」したことにより、私と日本人の教員・院生たちとの間の友情がいつそう深まった。一九八〇年から一九九〇年代には、日本の大臣が歴史問題での失言(実際は本音を吐いたことになるのだが)により政界や国民の圧力のもと相次いで辞職してい

た。一九九五年になって村山富市首相が有名な「戦後五十年の終戦記念日にあたって」と題する談話(村山談話)を発表し、過去の戦争に対する誠実かつ心からの反省を表した。これは右翼勢力の反対にはあったが、多くの日本国民の支持を得た。また日本の友人は私に次のような統計を示してくれた。それは、日中関係が良好な時には、毎年四、五万の日本の中学生が中国に「修学旅行」に来るが、中国に来た日本の子供たちは日本が中国を侵略したという歴史に対して、比較的しっかりと認識をもっているというものだ。

自らの経験から、私は「人民は歴史を創造する原動力である」という歴史唯物主義の原理に基づき、いわゆる「双管齊下」(同時進行)論を打ち出した。それは、真剣に歴史問題の解決に取り組む一方で、同時に日中関係の発展を強力に推進すべきであり、とくに後者はより重要かつ全面的であり、「日中間のすべての問題を超越する重要性」(鄧小平)をもつ、とする主張である。

その理由は簡単である。ただ日中関係の発展を抛り所に、絶えず両国の民間交流を広げることによってのみ、ようやく日本国民は認識の上でも感情の上でも「かつて日本は確かに中国に対しひどいことをした」という歴史の真実を受け入れることができるのである。言い換えれば、「日中関係が絶えず発展して初めて歴史認識問題を解決できる

のであって、歴史認識問題を解決してこそようやく日中関係が発展するというものではない」。また、いわゆる「歴史認識問題の解決」のカギは、日本が歴史事実と合致する正確な歴史観を持つて次の世代を教育していくことにある。もし、侵略の事実を否定する誤った歴史観によって青少年を教育することを放置していくならば、若者世代が日本国家の各種重要ポストに就いた時にどうなるのか、考えるところとする。なぜなら日本の未来は若者たちのものだからである。中国は日本との交流を深めることによって初めて、歴史事実を尊重する日本教育界の多くの人の支持を獲得ことができ、日本国民が正しく歴史事実を認識するよう促すことができるのである。

日中関係は政治、経済、安全保障、文化などいろいろなもの絡み合っている。このため、一本の論文だけではとても言い表すことができない。特に理系出身で長期にわたり技術関係の仕事に携わってきた私は、生産力発展の要求、また経済基礎の果たす役割という角度から日中関係を見ることを重視した。そこで私は「乗りかかった船で最後までやりとおす」ことにし、引き続き対日新思考について「二論」、「三論」、「四論」を書いた。そのうちに、「対日新思考」を文章のタイトルにしよとする雑誌はなくなつたが、私はタイトルを変えて引き続き「五論」から「九論」まで書いた（これは決してかつてソ連修正主義を批判した

「九評」（一九六三年から翌年にかけて中国共産党が発表したソ連共産党批判の九つの長編論文）を真似たわけではない）。二〇〇四年一月、日本僑報社はこれらの「九つの論文」を集め日本語版を出版した。「中国の「対日新思考」は実現できるか——「対中新思考」のすすめ」（単著）と『胡錦濤の対日政策——中国共産党・国家・軍を動かす歴代指導者が語った「日中関係」』（共著）の二冊である。この二冊はいずれも翻訳から校正、出版まで、「親中派」と揶揄される日本の友好人士の大きな助力を得た。

二〇〇三年九月二十九日『中国青年報』は以下のように報じた。「二七日、中華日本学会、中日友好協会、中日関係史学会、中国国際問題研究所および中国社会科学院のその他の研究所の専門家は、中国社会科学院日本研究所が開催した「日中『新思考』とは何か——馬立誠・時殷弘論文への批判」（日本語版）（金熙徳・林治波著、日本僑報社、二〇〇三年）の出版座談会の席上、相次いで発言し、目下論争的になっている対日「新思考」論を厳しく非難した。日本の大手メディアの北京駐在記者もほとんどこの座談会に出席した。『朝日新聞』、『読売新聞』、『しんぶん赤旗』の中国総局長も自ら出席した。この座談会には馬立誠と時殷弘は出席していなかったが、私は通知により出席した。座談会では、「ネット上で『漢奸』と呼ばれている方もいらっしやいますので、ここではお名前は敢えて申し上げ

げません」などと指弾する者もいた。座談会終了後、私より年長の日本研究者がわざわざ私の家を訪ねてきて、「もう危ないことはよせ」と好意で私に書くのをやめるように言ってくれた。私は身をもって、自分が日本研究所に入った際の「静かな文机があればいい」という初心から次第に遠ざかっていくのを感じた。

二〇〇二年以来、日中関係は徐々に不正常になり、両国間に横たわる歴史問題と現実問題が次から次へと起こった。二〇〇三年後半には、チチハルで旧日本軍毒ガス爆弾事件があり、また珠海の日本人集団買春事件、西北大学の寸劇事件などが起こった。二〇〇四年には、一月一日に小泉首相が四度目の靖国神社参拝を行い、中国の政府と国民の激しい怒りを招いた。三月には、「保釣」（釣魚島保衛）の活動家が釣魚島（日本名は尖閣諸島）に上陸し日本側に拘留された。中国が厳しく交渉して、日本は彼らを釈放した。四月には日本の右翼団体である日本皇民党の大型宣伝車が中国大阪総領事館の正門に突入し、日本の右翼団体が中国駐日外交官舎の破壊をたくらんだ事件としては、日中国交正常化以降最もひどい事件となった。八月には、アジアカップ・サッカーの開催期間中、北京等の会場で一部のサッカーファンが日本側に対して過激な行爲を行った。日本のメディアはこれを機に中国人の反日感情の高まりを広く紹介した。また日本の政治家もここぞとばかりに「チャ

イナ・リスク論」をばらまき、日本企業に中国から撤退するよう扇動した。特筆すべきはその年の五月下旬以来、日本のメディアは次々と、東シナ海の日本側のいう「中間線」付近で中国が海底天然ガスを開発していると一方的に報じ、中国の採掘行動は「日本の海洋權益を侵している」と日本国民の怒りを煽りたてた。このような背景のもと、一部の国会議員は狂ったように「國益を守れ」と叫び、「愛国パフォーマンス」を繰り返した。右翼学者として有名な中西輝政らは日中両国民の間の積年の憎悪を大いに煽り、「新日中戦争が始まった」と吹聴した。

これらの現象から、私は日本右翼の腹黒い意図を感じた。彼らは中国の改革開放と近代化建設のために必要な平和で安定した環境を破壊し、中国の民衆を怒らすことによって中国国内の長期にわたって安定してきた局面を破壊し、それにより右翼が望まない中国の平和的發展の歩みを阻止しようとしていると感じた。私は多くの論文を書いて日本右翼の陰謀を暴き、また中国人民には理性的に日本と向き合い、「日本製品ボイコット運動」など行わず（なぜなら経済のグローバル化が進む中、日中両国の経済はお互いに浸透しており、往々にして「日本製品」にも「中国製」が含まれるからである）、日本国民と協力して日本国内の平和主義の力を結集し、中国と日本右翼勢力との対立が日中両国間の対立にまで拡大するのを阻止しなければなら

らないと訴えた。しかし、民族主義者の意気が高揚している状況のもと、「理性」の一言を言おうものならず彼らに批判された。

一部の中国のネチズンが、日本からの技術の導入を政治問題とし、さらにはちようどその頃日本等の先進国から高速鉄道技術の導入を検討していた鉄道部を「売国部」と呼んだ時、生涯技術の仕事を携わってきた、妻であり清華大学のクラスメートだった黄愛英はそのことに対して理解に苦しみ、「私たちは今まで十数年も技術導入を行ってきたが、これまで技術問題と「売国」が関連づけられることはなかった。一体どうなっているのだろうか」と言った。

確かに、二〇〇三年後半から二〇〇四年にかけて私は大きなプレッシャーを感じ、苦しみの中にいた。気が立った多くの中国人、特に若者が小泉首相の靖国神社参拝という時流に逆らった行為に対して激怒するのは強い愛国主義精神から来ているものだということとはわかる。だが、私が「技術問題を政治化すべきではない」と言うだけで、なぜこのように激しい批判を受けなければならないのだろうか。また正常な技術導入プロジェクトが、どうしてただ日本からのものというだけで一夜のうちに数万にものぼるネチズンの反対の署名が集まるのか。はては京滬高速鉄道（北京—上海間の高速鉄道）に日本の技術を導入しようとする「みんなでレールの上に寝て妨害しよう」とか「北京

にいくなら（高速鉄道は使わず）ロバに乗ってでも行こう」などという議論が巻き起きているのはなぜなのか。私の頭がおかしくなってしまう、愛国主義とは逆の側に回ってしまったのだろうか。

清華大学の「紅でもあり専でもある（又紅又専）（思想面で社会主義的自覚に優れ、業務の面でも専門知識・技術に優れた者）」の育成目標を堅持する」という教育理念のもと、我々の世代の清華学生はしっかりと愛国主義の思想と感情を形成した。私個人について言えば、愛国という面では家庭でも良好な教育を受けてきたのだが、真に愛国主義精神に目覚めたのは、清華大学の教育があったからである。清華大学の教育の特徴は、蔣南翔、劉冰、艾知生などの大学指導者が、絶えず直接に全校学生に講演をし、私たちが正しい人生観、世界観を樹立すること、崇高な道徳思想を養うこと、しっかりとした基礎理論と幅広く深い専門知識を身につけることなどを着実に教え導いてくれたことである。私の記憶では指導者たちの話は非常に説得力があり、まるで一つの灯が私たちを「紅でもあり専でもある」者への成長の道を進んでいけるように照らしてくれているかのようなだった。

清華の教育に背いていないか、また清華の指導者や先生の教えから外れていないか、また二〇〇三年夏、私が「主流の声」と異なる主張を発表したときの出発点は一体なん

だったのか——私は胸に手を当てて自問してみた。考えて眠れぬ夜をたくさん経て、私は自分が打ち出したこれらの観点は、正に祖国と国民の利益を守るものであることを確信した。そうとなれば私は自分の観点を敢えて堅持しようと思った。そうすることが正に愛国主義の表現である。私は愛国主義は堅持するが、狭隘な民族主義には反対する。

私があればこれやと心の中で葛藤をしていた時、権威のあるメディアが研究報告という形で四号続けて私の「対日新思考」を論ずる」の要約版を連載してくれた。二〇〇四年一〇月下旬、私は退職して四年経っていたが、ハルビン工業大学の招きを受け、「中日研究所所長」に就任した。ハルビンで会議が開かれていたときに、私は北京からの電話を受け、北京に戻ったらすぐに関連部署に出向くように言われた。北京に戻ると、ある副部長（日本では副大臣に相当）が自ら電話で某日中南海（中国共産党中央委員会と國務院の所在地）の会議に出席するように通知をくれた。また私の車のナンバーを知らせるように言われたが、私は退職した普通の研究者であり、専用車はない。タクシーで行きますと伝えたところ、「では、中南海の入口に誰か迎えに行かせます」と言ってくれた。会議当日、私は中南海の入口で来意を告げると守衛はすぐに中に入れてくれた。私は受付に行き出迎えに出てきてもらうことはしなかった。ここは以前来たことがあったが、この機会に空気が

がすがすがしく、波がきらきら輝き、広くて静かな湖のほとりでぶらぶらしたかったからである。私は会場になつてゐる建物の入り口近くに來るまで何の会議なのか知らなかつた。

会場に入つて、それが胡锦涛主席が召集した小規模の座談会であることを知つた。胡主席はまだ到着しておらず、先に会場に入つた人たちが会場の入り口で出迎えようとしていた矢先、胡主席はジャケットを着て、布靴を履き、軽やかな足取りですでに会場に入つていた。主席は楕円形の机を半周回り、発言者と一人ずつ握手をし、会議の司会者の横に座つた。私は会議参加者がみな立派な地位の人なので、積極的な発言を抑えようと自分自身に言い聞かせた。ところが、一人目の発言が終わつた後、胡主席が私の名前を呼び、「馮昭奎、あなたの意見はどうだ」と言われた。会議前に、私の発言時間は四〇分あまりで、他の参加者の時間の二倍あまりだと聞かされていた。私は話しながら、指導者たちの反応を見ていた。心の中で「もしあくびをする人がいたら、すぐにやめよう」と思っていた。しかし、聞いている人は終始興味深そうに聞いてくれたので、私は十分に自分の意見を發表することができた。胡主席はみな発言に耳を傾けている間、常にノートに何かを書いている、時々一言二言口をはさんだ。その会議は大幅に予定の時間をオーバーした。会議終了後、胡主席はまた数名の発

言者と一人ずつ握手をして別れのあいさつをされた。握手の際、私は自分が清華大学の卒業生であることを告げ、胡主席と清華大学同窓としてのあいさつを交わした。

私はこの会議は非公開性のものだと思っていたので、外部には特に公言はしなかった。しかし、まもなく私がこの小規模の座談会に参加したことが、中国国内の日本研究者の間に瞬く間に広がった。二〇〇五年一月、中国人民大と日本の愛知大学が共同主催した大規模な日中シンポジウムで、セッションの座長は私を「馮先生は直接胡錦濤主席に日中関係について報告した唯一の日本研究者です」と紹介した。私はこの紹介が正しいかどうかわからない。しかし対日関係の問題において、胡主席が多様な意見を聴取したという事実は国内外の学界やメディアで公のものとなった。

胡主席の親しみやすい姿はテレビではよく知られている。今回の小座談会で間近に胡主席と接したが、胡主席はやはり謙虚で穏やかで信念を持った指導者であるという感

を深くした。

中南海の会議に参加して、私は普通の研究者でも最高指導者に直接自分の意見を述べる機会がありうると身をもって感じた。これが大きな励みとなり、私は大いに意気込み、二〇〇五年七月香港利文出版社から『中日関係問題報告』を出版し、二〇〇七年三月には〔北京の〕時事出版社

より『中日関係報告』（四六万字）を出版した。この二冊とも『日本文学刊』副編集長の林昶との共著である。その出版にあたっては想像しがたい紆余曲折があった。

しばらく前、ある雑誌の編集者から電話があり、日本問題に関する原稿依頼があったが、私は環境問題について大いに語った。編集者は驚いて、「馮先生が環境問題にこんなに関心を持っているとは思わなかった」と言った。実際私は八〇年代終わりから環境問題に注目しており、『新工業文明』という本を書いた。今日の深刻な世界的規模の環境危機に対して一定の理解があるのは、私が理系出身であることと清華大学の教育とに大いに関係があるのだが、ここでは説明を省くことにする。特筆すべきなのは、二〇〇七年一月、「国連気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第四次報告書」の指摘にあるように、気候変動は、現在地球の生態環境や人間社会が持続的に発展していく上で深刻な脅威となっているということだ。中国について言えば、過去二〇年でチベットの気温が一・一度も上昇し、七大河川の源である青藏高原の海拔四千メートル以上にある六二九八もの氷河の融解が加速しており、これらの河川の恩恵を受けている中国やインドなどの国の二〇億人の生活、工農業生産、発電、水運に影響を与える可能性がある。これと同時に、日中両国は共にそれぞれの国内の環境問題や両国の環境問題による相互影響に直面している。例

えば、中国の農村地区では、四〇%の飲用水が危険であり、四分の一の地表水は利用できず、五分の三の地表水は魚の養殖ができない。東部の都市では地下水の水位低下とそれともなう地表の陥没は、中国に六千億元近い損失をもたらし、長江の冬期の水位低下は歴史的記録を更新し、黄河の流出水量は四〇年前のわずか一〇%となった。空気や水の汚染により、中国の嬰兒が生まれながらに障害を持つ割合は世界保健機関の統計による世界の平均水準を上回っている。

日本と中国は比較的近いので、中央アジア、モンゴル、中国西北部の黄砂は日本に影響を与えざるを得ない。私は名古屋で、黄砂が飛んでくる度に、普段はきれいに保たれている自動車も砂まみれになり、持ち主はあわただしく自動洗車場に行つて洗車しているのを見かけた。

今日の気候変動等の環境問題は、日本を含む先進国が自国の工業化過程において長期にわたり蓄積してきた弊害の一つである。現在でも先進国の一人当たり平均二酸化炭素排出量は発展途上国の数倍である。しかし同時に、先進国、特に日本は先進的な省エネや環境保全の技術と経験を有している。これらの先進国が、現在工業化の途上にあつて二酸化炭素排出量が急速に増え続けている発展途上国（特に中国やインドなどの発展途上の人口大国）に対して進んだ省エネ・環境保全の技術と経験を積極的に提供する

ことが、人類が地球を救えるかどうかの一つの重要な課題となつている。

地球や地域の環境問題が日増しに緊迫する情勢のもと、日中関係には再び波風を立てる時間は残されていない。日中両国は一九八〇年代にはソ連に対抗するため、戦略的関係を結んだ。二一世紀に入り、日中関係は長期的に安定した発展をするために、両国の新しい戦略的関係を速やかに構築する必要があるに求められている。

今年（二〇〇八年）四月、胡锦涛主席が訪日した際、日中間で両国の国交正常化以来の「第四の政治文書」が調印され、双方は日中間で「お互いに脅威とならない」ことを確認した。これはすばらしい歴史的意義と世界的意味を持ったコンセンサスである。なぜならもし大中間で引き続きお互いに敵意を持ったり、故意に「敵」をつくったりすれば、「互いの脅威」に対抗するために力を注ぎ、この人類の「共通の脅威」である環境問題を棚上げせざるを得ない。そうなれば、人類は尽きることはない災難に見舞われ、永遠に後世に顔向けできない歴史的過ちと罪を犯すような深淵に落ち込んでいくのは免れないだろう。

環境問題は日中関係の「戦略的きずな」となるだけでなく、中国とアメリカ、ヨーロッパ、ロシア、インドおよび世界各国との関係を発展させる「戦略的きずな」にもなるだろう。しかし、共に東洋の文化や伝統を持つという面か

らみても、また距離的に近い地理環境および黄砂、酸性雨などが「国をまたいで旅する」ような地域性の環境問題からみても、日本と中国は環境問題において多くの共通の利益、共通の課題、共通の認識がある。環境危機に共同して対応していくことは、日中間の戦略的互恵関係のうち、最も大切なきずなとなるに違いない。

二 人生を変えた「偶然」

私はなぜ中年になって突然自然科学の分野から一八〇度違う社会科学の分野に足を踏み入れたのだろうか。その理由は単純に偶然によるもの、しかも「度重なる偶然」によるものであるが、これらの偶然の源は中国の改革・開放にあったといえることができる。

一つ目の「偶然」は、話せば長くなる。一九七八年六月二三日、鄧小平は清華大学の工作報告を聞いて次のように明確に指示した。「私は留学生数を増やすことに賛成する」、「それは五年以内には効果が表れ、我が国のレベルを引き上げる重要な方法の一つである。少数ではなく、数千数万の単位で派遣しよう」、「あらゆる方法を講じて、段取りを速やかにし、しだいに拡大していこう」。

鄧小平の留学生派遣の指示が確定したことにより、高等教育部は一九七八年九月一日に派遣留学生選抜のための外

国語試験を実施すると決定した。この決定は一九七八年初めには各機関に到達されていた。研究所の一部の同僚たちは海外留学の申請ができると知り、非常に喜んで興奮し、早くから九月一日に行われる派遣留学生外国語試験の準備を始めていた。当時、私は海外留学の事などよくわかっていなかったし、関心もなかった。

私は中学から大学まで、一〇年間ロシア語を勉強したが、当時の留学試験の科目は英語や日本語などの西側の国の言語だった。大学五年の時、第二外国語で少し英語を勉強したこともあるが、主要科目の勉強で非常に忙しく、外国語を重要視しておらず、ABCからXYZのアルファベットを覚えたただけだった。しかし、清華大学を卒業し仕事に就いてから、技術の仕事に携わるには英語はとても重要だと感じ、独学で英語を勉強始めた。一九六九年、私の所属機関の知識人（当時は「臭老九」「九番目の鼻つまみ者」と呼ばれた）はみな軍の農場に下放され、私は英語の勉強を中断せざるを得なかった。しかし納得がいかなかったもので、英語版の『毛沢東語録』を持つて行った。政治学習の時間になるとみな赤い『毛沢東語録』を掲げて読むのだが、私はいつも人より高く掲げることになっていた。それは私が語録を読みながら、英語版から中国語の単語を「かえって求め」「反求」ていることを他人から悟られないためであった。夜、数十人が並んでぎこ寝をするのだが、

そんな中でも私は軍の中隊長が見回りに来ないかハラハラしながら、布団の中で懐中電灯をつけて勉強をした。一九七二年に下放が終わり、軍の農場から元の職場に戻ると、自由な時間がたくさんできた。私はよく研究所の図書館に行き、輸入された英文の科学技術雑誌を読んだ。そこで私は輸入雑誌のカラーページの一部分が「真つ黒顔」に塗りつぶされていることに気づいた。初めは誰かがいたずらをしたのだろうと思ったが、後にそれは図書館が「精神汚染」を防止するため、専門職員に届いたばかりの輸入雑誌の「身体検査」をさせているのだとわかった。少し露出度が高い美人などが載っているのだとわかった。少し露出度が高い美人などが載っているのだとわかった。少し露出度が高い美人などが載っているのだとわかった。少し露出度が高い美人などが載っているのだとわかった。

辞書を引きながら英文の雑誌を読む以外に、私は英語の勉強を兼ねて『計算機世界』紙のために資料の翻訳を行った。当時、翻訳を何文字しようと翻訳料はなかったが、自分の翻訳した文章が発表され、また翻訳文の最後に括弧で自分の名前が入れられているのを見るだけでとても満足だった。

一九七八年八月下旬、私の妻（現在は「つれあい」というべきか）が私に、他の人はみな英語の試験を受ける準備

をしているのに、どうしてあなたはチャレンジしないのか、そうすればまた独学で勉強した英語がどの程度のレベルまで行っているのか試すこともできるのにと言った。次の日、オフィスビルの廊下でばったり上司にあったので（私は余程のことがない限り上司を訪ねない質だった）、軽い気持ちで「私も英語の試験を受けたい」と言うと、上司はすぐに派遣留学生選抜を担当する人事部門に伝えてくれた。申請期限は過ぎていたのだが、申請を受理してくれた。

二つ目の「偶然」は手短かに言えば、当時の高等教育部から通知が来て、もともと九月一日に実施予定の外国語試験が九月一五日に延期されたことである。これにより私は素晴らしい秋の季節に半月の準備期間を得ることができた。正直言って、もしこの半月の時間で英語の文法を復習できていなかったら、きつと合格はしていなかっただろう。

三つ目の「偶然」は試験当日に起こった。私の隣人でもある同僚は英語専攻ではなかったが、中学から大学までの外国語科目ですべて英語を学んでいた。しかも一九七八年初めから全力を尽くして復習にあたっていた。彼と比べると私は学校では基本的にはロシア語しか勉強したことがないし、今回の試験も付け焼刃で、ただ半月の空いた時間で復習をしたのみだったので、自分の英語のレベルは他人より一段劣っており、彼とは比べ物にならないと思っ

た。試験会場へ出かける前、私が彼と庭で話をしていた時、彼は突然流暢な英語を話した。私は圧倒され、意固地になって「もういい、こんなレベルで英語の試験なんてとんでもない、やめたよ」と言った。そこで彼は一人で慌ただしく試験会場へ向かった。私は彼が行くのを見送った後、庭で一人うろろしていた。隣近所の人たちがこのことを知り、みな口々に「行きなさいよ、せつかく準備したのだからもったいない」と私を説得し、数人の仲間無理やり私を近くのバス停まで連れて行った。

当時、私たち六つの家庭が、一つの大教室を六つに区分した平屋に住んでいた。庭は共有で、各家庭のドアは「たくましい若者が一蹴りすれば開く」ようなポロポロの木製で、寒くさえなければ、帰宅後みな庭に集まり、一少年時代」によく見た澄み渡った月の光や満天の星のもとおしゃべりをした。また雨期になれば、団結して「堤防の建設」、「洪水との戦い」を行い、雨水が土地の低い「共同の家庭」に入りこむのを防いだ。清華大学で集団生活に慣れていた私にとって隣人との生活はとても楽しかった。しかしながら、このような親密な隣人関係は、「コンクリートの森」のような高層マンションに皆が住むような今日では、ほとんど過去のものとなっている。

私たちの居住地は北京の西郊外で（現在は市街地が拡大され、もはや郊外ではなくなつた）、虎坊橋付近にある試

験会場までとても遠く、バスに乗っても一時間あまりかかった（当時は「タクシーを呼ぶ」という概念はまったくなかった）。それに加え、郊外のバスの運行間隔はとても長く、三、四〇分経ってもバスが来ない時もあった。このため、私たちが庭から出た時、私は心の中では「みんな私を試験会場まで連れて行こうとしても無駄だ。どうせ試験時間には間に合わない」と思っていた。ところが、皆が私をバス停に送り届けるや否や、一台のおんぼろのバスがガタガタと音を立ててゆっくりバス停にやってきた。本当にいいタイミングだった。後に振り返ってみるのだが、そのタイミング良くやってきたバスが稼いだ二、三〇分が、私の後半生を変えたのである。

四つ目の「偶然」は試験結果の発表の後に起こった。本当に「まぐれ」といおうか、まったく自信のなかった私になんと筆記は六七点、会話試験は「五マイナス」（最高ランクの下位）という素晴らしい成績を出した。高等教育部の規定では、筆記試験が七〇点以上のは一年の研修を経ないで直接出国できるとなっていたが、私の筆記試験は七〇点を超えてはいなかったが、会話試験の結果が最高ランクに達していたため、人事部から通知があり、私は研修を経ないで直接出国できる組に入った。私は慌てた。なぜならもともとヨーロッパやアメリカに留学に行きたかったわけではないからだ。遙かかなたの、見知らぬ

土地に行くなんて、私にはそんな興味も度胸もなかった。

私が出国を拒否したことを知り、人事部は困った。その試験で多くの人は筆記でたった二、三〇点、会話試験は一、二点で、合格者が足りず、人事部は出国人数の目標に達しないことを心配したのだ。そこで私は日曜日に人事部幹部の家に招かれ、幹部の再三の説得をうけた。最後には双方が妥協し、私は日本に留学に行くこととなった。その理由は、まず日本は中国と「一衣帯水」というようにとても近く、行った後慣れなければすぐ帰国できる。おまけに人事部の幹部は付け足して言った。「日本人はみな英語を話せる」、これは高等教育部が把握していることだ、と。

実際、高等教育部が言った「日本人はみな英語を話せる」というのは事実ではなかった。一般の日本人は英語が話せない。たとえ日本の普通の科学技術者であっても、彼らの英語のつたなさに、イギリス人、アメリカ人も苦笑いするほどである。このことは、当時の我々中国人が外国の事情をほとんど理解していなかったことを表している。後に私の日本の友人の一人、武吉次朗が言ったことだが、彼は一九八〇年代前半に中国某省の副省長に随行して日本のスーパーマーケットの視察に訪れた。その高級幹部はスーパリーの客が勝手に手当たり次第に陳列商品をかごに入れるのを見て、日本側に「日本はいつから共産主義になったのですか」と質問した。なぜなら中国の教科書では、共産主

義社会に入れば「各自が必要なだけ取ることができると教えているからだ。その副省長は、客が自由に商品をかごに入れるのを見ただけで、最後に客がレジでお金を払うところまで注意していなかった。そのため、日本が「各自が必要なだけ取ることができる」共産主義社会に入ったと勘違いしたのだ。このような高級幹部でさえ外国に対して理解が不十分だったのに、私のような一般庶民が見知らぬ外の世界に一種の「恐れ」を抱いたのも不思議ではない。

私はしぶしぶ日本行きに同意した後、引き続き仕事をしながら、空いた時間を利用してラジオで日本語を独学した。当時、出国までの道のりはとても長かった。私のように「研修を経ないで直接出国できる」ものは、日本の受入れ側との連絡やいろいろな出国手続きで、大体一年間を費やした。研修を受けてから出国するものに至っては、二、三年経っても出国できないものもいた。一九八一年秋の深まった頃、私が留学からもどった後、一九七八年に一緒に試験に参加した同僚に「ぼったり会ったのだが、同僚は「君は帰ってきたのか。私たちはいつ出国できるやら」と言っていた。

確か一九七八年九月だったと思うが、すでに若いとは言えない出国を控えた私たち「留学生」は北京外語学院に集まり、出国前研修に参加した。欧米組と日本組にわかれて研修を行った。日本留学組の研修担当者は、長く日本駐在

記者を動めた劉徳有氏を招き、私たちのために日本の状況を紹介してもらった。この三日間の研修で、一つ奇妙な「要求」があったことを覚えている。それは日本では、地下鉄に乗ってしようとバスに乗ってしようと、絶対に自分の向かい側に座っている日本人、特に異性の日本人（研修に参加している留学生のほとんどが男だったので、ここでいう「異性の日本人」とは当然日本人女性のことを指す）をじろじろ見てはいけないというものだった。しかし、地下鉄や電車に乗っていて、いつも顔をあげて上を仰ぎみる姿勢をすることはできない（この姿勢は他の人に「ちよつとおかしいんじゃないか」と思われるだろう）。そのため、私は日本では、公共交通機関を利用するときは本を読むのでなければ新聞を読むといったように「頭を下げ、下を向く」ようにした。実際、公共交通機関に乗っているときに本や新聞を読んだりするのは多くの日本人の習慣となっている。

五つ目の「偶然」は二年間の留学生生活が終わった後に起こった。

私を受け入れてくれた日本側の機関は浜松市にある静岡大学工学部電子工学研究所で、安藤隆男教授の指導のもと電子撮影機器の研究を行った。主な作業は実験であり、また毎週安藤教授の指導のもとでゼミに参加した。初め私は心配だった。なぜなら大学卒業後、文革だったり、農村に

下放されていたりと、職場でしつかりと研究をしないまま、およそ十年の時間を無駄にしてきたからである。少し評価される仕事といえば、貴州省で「三線建設」に携わっていた時、私は一人で半導体生産ライン工場の一部の技術設計を担当した。しかし、「三線建設」の多くの工事が中止となり、私の設計もただの紙くずとなった。

私は卒業後基本的には自分が学んだ半導体理論と密接に関係した真の研究をしていなかったもので、静岡大学の研究所での学習・研究に適應できるか非常に心配だった（当時、私と一緒に研修に参加し、アメリカに行った留学生の一人が学業のプレッシャーが大きすぎて、帰国後国に顔むけできないと悩み、異国の地でひっそり首つり自殺をしたと聞いたことがある）。しかし、清華大学で多くの実習、特に六年次の卒業設計の実験を経験したことで、私はある程度しつかりとした実験能力を鍛えることができた。また、日本に行つてからは何事にも一生懸命取り組み、毎日十数時間の研究を行った。それゆえ、安藤教授は基本的に私の研究に満足してくれた（後に、安藤先生と私の研究成果は連名でIEEE（米国電気電子工学会）雑誌に掲載された。また私たちは日本の電子学会の全国大会でも発表を行った）。毎週のゼミでは、安藤先生は学生に自分が選んだアメリカ等の学術雑誌に掲載されている論文を「輪読」（順番に閲読し、討論を行うこと。これは日本の科学技術

研究者が好む集団学習方法の一つである)させた。参加者は安藤ゼミの大学院生である。私は清華大学でしっかりとした半導体理論の基礎を築いていたため、ゼミでも自分の思うように対応できた。時には先生の代わりに学生の質問に答えたりもした。

留学生活の二年目、中国科学院電子研究所の室主任が私の在籍する静岡大学工学部電子工学研究所を訪れた。その太った主任は私の大学での学習状況を把握した後、私に帰国した後、自分のところで働いてみないかと言ってくれた。彼の励ましにより私は国家の私たち留学生に対する大きな期待に背かぬよう、また日本で学んだ知識で祖国に報いようという決心をさらに強めた。一九八一年秋、留学が終わり私は所属機関に戻った。そして、私が日本で学んだものは、ここでは役に立たないとすぐに気付いたので、日本で学んだものを十分に活かせるように中国科学院電子研究所への異動を申請した。しかし、当時は「人材の流動」の道はまだ開かれておらず、留学生は必ず所属機関に戻らなければならなかった。たとえ学んだ専門と所属機関の仕事内容が一致していなくても、それに応じて異動することはできず、いくら懇願しても無駄だった。このため、私は仕方なく所属機関で「耐え忍び」、国外から導入した設備の英文資料の翻訳作業を引き受けた。徐々に私は資料の翻訳作業に大きな興味を持ち始めた。時間ができると、私は

日本での見聞や集めた資料を使って最新科学技術の発展を紹介する一般向けの科学記事を書き、『人民日報』、『光明日報』、『世界知識』、『解放軍報』、『知識は力である』などの新聞、雑誌に「順繰りに発表された」(主な文章は私の一冊目の著書、一九八五年に科学普及出版社から出版された『電子風雲録』に収録されている)。

私がこれらの科学技術の普及のための文章を書くのには一種の抑えることのできない衝動があったようだ。それは理由はある。清華大学での六年にわたる教育によって、私は科学技術を熱愛するようになった。清華の先生たちはいつも様々な方法で最新の科学技術理論を収集し私たちに教えてくれたが(出来合いの教科書がなかったので、先生たちが教えてくれたほとんどは先生方自身で臨時教材を編集したものだ)、それは高レベルの最先端技術に対する鋭い嗅覚も育ててくれた。まるで無線アンテナが空中で電波信号を受信するようなもので、清華の教育により私の頭にはまるで最新科学技術を専門に捉える「アンテナ」が生えたようであった。

一九八三年になると、「人材の流動」はもはや「タブー」ではなくなり、私に再び「転職」の思いがわき起こってきた。ちょうどこの時、国家科学技術委員会の胡局長と李局長が新聞で私の発表した科学技術記事を読み、とても気に入ってくれ、私を国家科学技術委員会に異動させようとし

た。私の同僚たちは私が指導者たちの「専属ライター」となるに違いないと推測した。ある時、胡局長（後に中国自然科学基金会党委員会書記となった）が私を呼び出した。

彼は頭を左右に振りながら、私が「光明日報」で発表した「ソフトウェアの台頭」の初めの一段落を暗唱すると、「よく書けている」と言い、早く科学技術委員会の公募に応募するように私に勧めた。私は職場に戻り同僚と相談をした。すると皆が皆、私のような本の虫には上層機関での仕事は向いていないし、さらに役人にも向いていないと言った。私はその通りだと思い、国家科学技術委員会の厚意を放置しておいた。すると科学技術委員会の指導者の催促が激しくなり、私の職場の上級機関のトップに直接、すぐにも科学技術委員会に私を異動させるように通知すると言ってきた。私は「逃げるが勝ち」でこれだけ早く次の活路を見いださなければならぬと感じた。ちょうどその頃、当時成立して間もない中国国家特許局（原文は「専利局」も「規模拡大のための人材募集」をしていた。私はきつとそこの仕事は一日中部屋の中にもつて外国語の資料を翻訳したり調べたりするもので、私の希望と合致すると思ひ、急いで特許局に行き応募した。私は申請書を記入し、職場で返答を待つことになった。

一か月待ったが、特許局からまったく音沙汰がなかった。ちょうどその年の夏、外交部に属する『世界知識』と

いう雑誌編集部が開いた作者座談会に参加するため、私は色とりどりの光景が広がる中山公園へ行つた。私はその雑誌に数本の科学技術の普及のための文章を発表したことがあったので招かれたのである。私は会場でにこにこ笑うお年寄りに会つた。彼は中国社会科学院日本研究所政治研究室の主任をしている何倩だと自己紹介した。何氏と話をしているうちに、毎日出勤する必要がない職場があると私は初めて（四十数年生きて初めて）知つた。何倩氏は私に、今日日本研究所は人手が足りない、あなたは日本に留学したこともあり、日本についての理解も比較的があるので、日本研究所に来ないか、と言つた。私の想像の中では、これもまた一日中部屋の中にもつて外国語の資料を翻訳したり調べたりできる好都合の場所であつた。私の理想は、ただ「静かな文机」が欲しいだけで、落ち着いて外国語の資料を翻訳したり、調べたりできればよかつた。「まったくかけ離れた」理系やら文系やらという区別は、私にとって重要ではなかつた。そこで私はすぐに日本研究所に手紙を書き、日本研究所で働きたい旨を伝えた。手紙を出して一週間も経たないうちに、日本研究所の人事担当の史華女史から熱意のこもつた手紙を受け取つた。手紙には、私が研究所で働くことを歓迎する旨が書かれていた。また自ら私の所属機関に来て異動手続きを行つてくれた。およそ十数日ですべての異動手続きが完了した。日本研究所に出動

する準備をしている時、思いがけなく中国国家特許局の手紙を受け取った。手紙には「貴方が特許局で働かれることを心から歓迎します」と書かれていたが、このときには、この遅ればせながらやってきた歓迎通知もただ放置するのみだった。

この十数日の差が私の「後半生」の人生を変えた。もしこの「偶然」を含む五つの「偶然」の鎖が一部でも欠けていたら、私が自然科学分野から社会科学分野へ転向するという人生の大転換は起きなかつただろう。また私個人の人生が変わったことにより、国家からすれば、数百万の国家公務員および準国家公務員の名簿から工程師および特許審査員が一人減り、日本問題研究者が一人増えることになつたわけである。

三 忘れがたい清華大学の教育

私は古い友人から、四三歳で自分の意思とは関係なく理系から文系へと転向したことに後悔はしていないか、理系から文系への転向によつて、清華での六年間の勉強が無駄になつたのではないかと尋ねられたことがある。私は答えた。第一に、確かにこの転向は基本的には「犬も歩けば棒にあたる」状態だったが、これについては後悔をしたことがない。第二にたとえ文系の仕事に携わるることになつて

も、清華での六年間の勉強は決して無駄ではなかつた。

清華大学の先生が私に基礎理論と専門技術を学ぶよう教育してくれたおかげで、私はすばらしい教育と厳しい訓練を受けることができた。しっかりとした基礎理論と広く深い専門技術知識を身につけ、科学的思考や問題を分析し解決する能力を養うことができた。また清華大学の指導者や先生が「紅でもあり専でもある」ことを堅持するよう育ててくれ、マルクス主義哲学を真剣に勉強するよう導いてくれた。自分でもまた授業の合間にエンゲルスの『自然弁証法』を熟読し、そこから弁証法的唯物論と歴史唯物論の立場、観点、方法をしっかりと身につけることができた。これらは後に私が日本問題を研究する際に、最も重要で最も役に立つ思考の武器となつた。

清華大学が私を技術および生産の現場の最前線へ踏み込むよう導いてくれた。労働者に学び、農民に学び、軍人に学び、真剣に卒業設計実習に取り組んだことは、私の人生観、世界観の形成に大いに影響を与え、しっかりとした社会責任感も植え付けてくれた。社会科学の研究に携わる中で、人民の苦しみや生産の最前線における辛苦を自ら経験するとしなないとは、多くの問題に対する見方が大きく異なるということを、私はしみじみと感じた。

清華大学の学習生活が集団主義精神を養ってくれたおかげで、私は日本研究の過程で集団の力が発揮できるよう気

を配り、お互いに啓発し、長所を取り入れ短所を補い、全員
の知識を集めることによって一連の共同研究の成果をあ
げることができた。

清華大学の素晴らしい校風と文革が襲ってくる前に完了
した丸々六年間の学業により、私は苦勞をいとわず勉強を
し積極的にいろいろなものも吸収する精神を学んだ。その
ため、転向した後、辛い独学を通じて文系の研究に必要な
基礎的理論や歴史知識を基本的に学ぶことができたし、ま
た私の第三の外国語——日本語も十分に駆使できるレベル
にまで達することができた。

清華大学は学生に「全面的な発展」をするように心がけ
てくれた。そのおかげで私のような、ぼーっとした者でも
クラシック音楽に非常に興味を持つようになった。私は、
音楽教室の陸先生がベートーベンの九大交響曲の奥深い内
容を少しずつ解説して、私たちのクラシック音楽の鑑賞能
力を高める手助けをしてくれたことが忘れられない。音楽
は常に私の執筆におけるひらめきの源となっている。

清華大学は私と妻を育ててくれただけではなく、私の息
子の馮旌も育ててくれた。私たち一家は母校への感謝の気
持ちでいっぱいである。

私は一九八三年に転向した。それも「一八〇度」の「転向
であった。またそれは度重なる「偶然」によるものだった
が、私は人生の方向転換を行った。しかしこの「偶然」は

私に悔いのない人生をもたらしてくれた。この「偶然」が
私に悔いのない人生をもたらしてくれたことは、間違いな
く清華大学の教育と深く結びついている。清華大学で学ん
だ歳月は私の心の奥深くに刻まれ、永遠に忘れることはな
いだらう。

※この文は『温故』および『南方窓』に発表した文章を合
せて一編としたものである。

訳注

(一) 著者の父馮賓符氏(一九一四～一九六六)は一九三〇
年代から四〇年代にかけて『東方雜誌』および『世界知
識』に国際問題の評論を寄せるなど、国際問題評論家とし
て著名であった。中華人民共和国建国期には中国民主促進
会中央理事、世界知識出版社副社長、人民外交学会理事な
どを歴任している。著書に楊学純・沈中明編『馮賓符国際
問題文選』上・下、世界知識出版社、二〇〇二年がある。

※本文中の「」は訳者による。